

第43回全日本中学生水の作文コンクール 入選

水と命

佐賀県 佐賀市立川副中学校 二年 轟 貴博

命を支える水は、時として私達に牙をむくこともある。

昨年、佐賀県を含む九州北部で集中豪雨が発生した。八月二十八日の記録的豪雨は、数十年に一度の災害の恐れがあるとして、佐賀県や福岡県、長崎県に大雨特別警報が発令され「命を守る、最善の行動をとる」警戒レベル五にあたる程だった。その時は、緊急速報メールが鳴り続け、あの音が耳から離れず、不安な日々が続いたことを覚えている。この大雨で、大勢の人が冠水や停電、断水などの被害を受け、大切な命さえも奪われた。今年も同じレベルの大雨が降り、日本各地で被害を受け、長い梅雨となった。この体験を受け、私は天災の恐ろしさを知り、防災の意識が高まった。

その一方、水は全ての生物にとって、必要不可欠な存在である。日本には、川やダムがたくさんあり、降水量も多いので、水資源は豊富だ。そのため、蛇口をひねれば直接飲める程の安全な水が出る。その水は、炊事や洗濯、トイレ、風呂など様々な場面で使われている。このように、どこでも簡単に手に入る水だが、ダムや浄水場、各家庭に送るための配水管などの施設が、きちんと整備されているおかげだということを忘れてはいけない。

しかし、世界には、水不足や衛生事情に苦しむ国が多く、問題となっている。現在、六億六千三百万人もの人々が、安全な水を飲むことができず、池の水や整備されていない井戸から水を汲んで生活している。

多くの途上国では、水汲みは子どもの仕事であり、学校に行くことも難しく、不衛生な水のせいで病気や死に至ることも多い。ユニセフでは、きれいな水が使えるように井戸を作り、井戸に汚れた水が入らないようにトイレを作っている。ユニセフ募金は、命を救うために役立っているのだ。

これほど大切な水をどう使っているか。無駄にしてはいないだろうか。

私は、二年前からエコ活動に取り組んでいる。きっかけは、エコ自慢コンテストで入選したことだ。私は「節水」について研究し、ペットボトルを使って、水かさの増加量について調べた。二リットルのペットボトル六本を浴槽に入れることで、十二リットル分の節水ができ、水かさが二センチメートル以上増した。それを一ヶ月続けることで、お風呂二回分の節水ができることが分かった。他にも、トイレのタンクにビール瓶を入れ節水したり、日常生活においても節水を心掛けた。一人ひとりの些細な気遣いが、大きな節水へとつながる。これらのエコ活動は、今後も続けていきたいと思っている。

もしも、世の中から水が全て無くなってしまえば、わずか数日で絶滅してしまうだろう。なぜなら、水は生命の源であるからだ。全ての生物は、水によって生かされている。

過去には、有機水銀による水俣病や、カドミウムによるイタイイタイ病などの有害化学物質による水質汚染が問題とされていたが、現在は、マイクロプラスチックが原因で海洋汚染を引き起こしている。五ミリメートル以下のプラスチックが、自然界で分解されず留まるため、食物連鎖により体内で悪影響を及ぼしているからだ。これを無くすために、日本でも、紙製ストローやレジ袋有料化などで、プラスチック減量に努めている。私達にできることは、美しい地球を守ることだ。

かけがえのない命を守るためにも、水を大切にしなければならぬ。私達は、水の恵みに感謝し、世界中の皆が支えあって生きるべきである。「私達の命は、水と共に生きている。」